

研究の栞

日本古建築研究の栞（第十九回）

工學博士 天 沼 俊 一

第二十八 平 瓦

『三才圖會』

法陰陽而平瓦稍匾而仰丸瓦圓而覆故有牝牡平瓦
版筒等之名

『工業字解』

版音板ハ_ン〔集韻〕一ニ曰ク牝瓦〔和名抄〕一ハめかば
らト訓ス今俗ニ平瓦トモ云フ

『建築字彙』

伏圖ニ於テハ矩形ヲナシ横断面ハ弧狀ヲナセル
瓦ヲイフ。其凹面ヲ滑カニシ凸面ニハ餘目ヲ付

ス之ヲ牝瓦トモ稱ス……………

とある。定義は右の様に一寸難かしい様な氣がするが、平たくいふと四角で少しく一方に反つてゐる瓦のことである。もつと卑近な例を求むると四角な一方へ反つた煎餅のやうな瓦である。

餘目サツラメとは凸面即ち下側即ち土へつく方の面へ、

毛筋棒の様なもので滑らぬ様に筋をつけるのである。これを「さゝらめ」といふ。但し古代のは餘目はつけずして、いろいろな模様や文字を打出しにしてある、時としては凹面即ち上側へ文字を現はしたのもある。また「凹面ヲ滑カニシ」と建築字彙

にあるが、これは新しい時代ので、古いのは矢張布目があるのもある。平安以前のは凸面に布といへば布だが、縦が太く横の細い糸で編んだと思はるゝきれ地の目が一面につけてあるのが多い、これは縦糸の凹んだ所に土が入り込むから、滑りを悪くするためには効果が多し筈である。此れを布目といつても差支はあるまいが、細かい布目と區別がつかぬから荒布目と命名しておかう。但し飛鳥時代の四角な二分位の大きなのは布目とは言へないあれは方眼といふべきであらう。

扱て次に平瓦の裏——即ち凸面即ち土につく方の面——の文様を分けてみる。

文様の種類	時代	備考
一方眼	飛鳥・奈良	二分角深さ五厘位の打込み約一分弱の距離に並んでゐるのは古いので、奈良時代の如く第百一十圖の打込みがある大小不同の打込みがあるのが出たる尤も大さの弊然たるが、飛鳥時代同様のものも勿論ある。

二	三	四	五	六	七	
荒布目	草花	五輪塔	樹葉・菊花・斜十字・巴紋等	複合紋	七年號月日等	
奈良・平安	平	平	鎌	鎌	鎌	
	安	安	倉	倉	倉	
僅に纏をかけた縦筋が目 立ちは始んだ判らぬか これは奈良時代の初めか ら平安までらしい。	葉と莖と苗とより成る一 刻の草花を市狭き板に つげた様にして瓦型の面を かめた様にはこれより陰 かもしぬが、鎌倉時代の 安も知れぬが、あつた。	例へば第百十二圖に示す 蓮華の復合紋は、異る のをいふ復合紋と異なる 倉に指したの紋である。鎌	總甲型内に巴紋を入れた り寺名頭字の如きもの である。入れたの等指すの	文字には型押さ極書さあ るが地名・郡名等を極書 たいに押し、長文句を書い たいに押し、長い文句を書 たいに押し、長い文句を書 たいに押し、長い文句を書 たいに押し、長い文句を書	板面に刻した年月日を書 たいに押し、長い文句を書 たいに押し、長い文句を書 たいに押し、長い文句を書 たいに押し、長い文句を書	文字は、花文様は、花文様 の文様は、花文様は、花文 今文様は、花文様は、花文 の文様は、花文様は、花文 てのお文様は、花文様は、

八	龜	甲	鎌倉	
九	菱	鎌倉・室町		
一〇	月と鳥	室町		鎌倉らしいが、或は室町かも知れぬ。今安全な方をさつて室町としておく。其内も一度調べてみるつもりである。
一一	鮫目	桃山以降		
一二	矢筈文	平安以前か		現存する唯一の例による。平安時代以降のものではないやうである。仍て今は平安時代以前かとして、假に最後におく事にした。

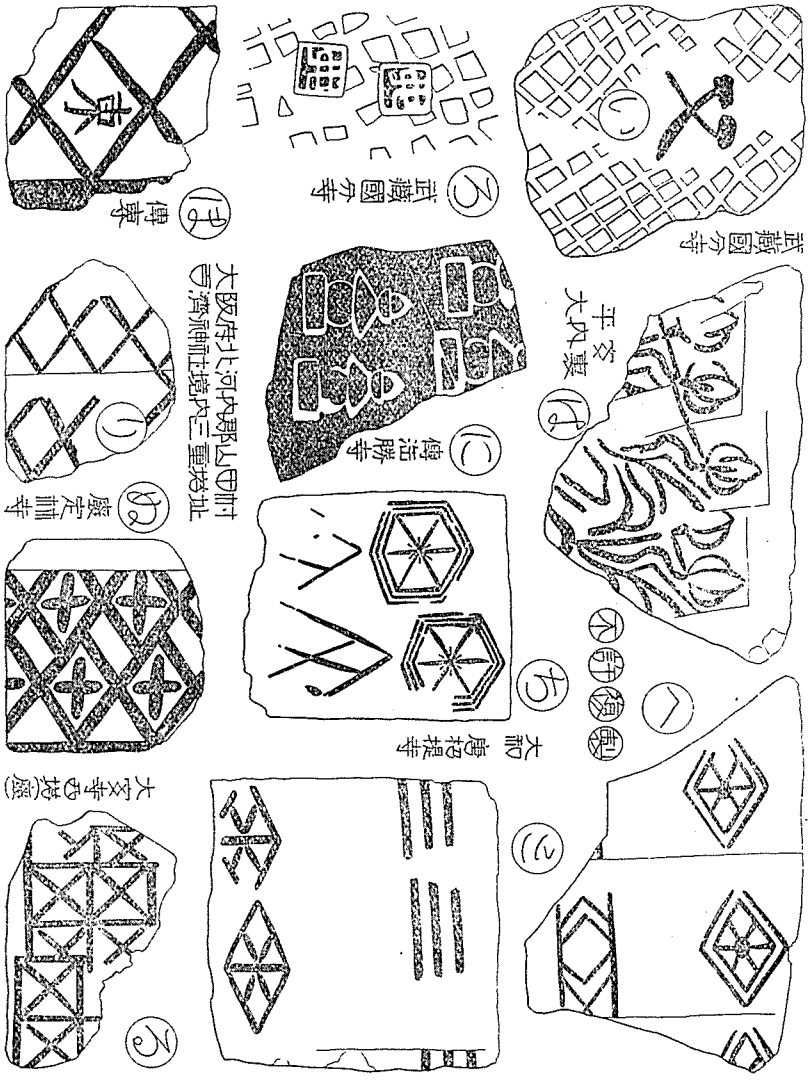
此等もまた疏瓦花瓦の例に倣ひ、表に作つてみたら早分りがするかも知れぬが、簡單なものだからさう迄せずともよからう。また文様の種類や其形等に就いては一々記さずとも第百十一・第百十二の二圖を見れば自然に了解出来やう。巴紋また時代の特徴をよく現はしてゐる。

たゞ此所に矢筈文に就て少しかいておかうと思ふ。第百十三圖(㉓)に於いてみる様に、先の尖つた

即ち頂角の小さい二等邊三角形の先端をもつた、恰も續飯をつくる籠の様な木片か何かで、平瓦の下側即ち土につく方に矢筈型の刻みをつけたものであつて、其型は先の方に力を入れたと見え、元に近くなるに従ひ自然に深さを減じてゐる。こんな深い型をつけたらば決して瓦は入ることはないが、瓦は大變に厚いから、こんな許りあつたら重量は大したものであつたらう。

此の瓦は厚さが約一寸ある、そして其兩側面に圖の如く $0.8 \times 0.15 (0.9) \times 1.5$ の孔が二ヶ所づつあいてゐる。此の孔は何のためか。隣りの瓦とこれとの間に金屬製の「太柄」でも入れたものか。まさかさうとも思はれぬが、何しろ唯一つきり實物がないから、どうも兩側面にあげてある長方形の深い孔が解決出来ぬ。

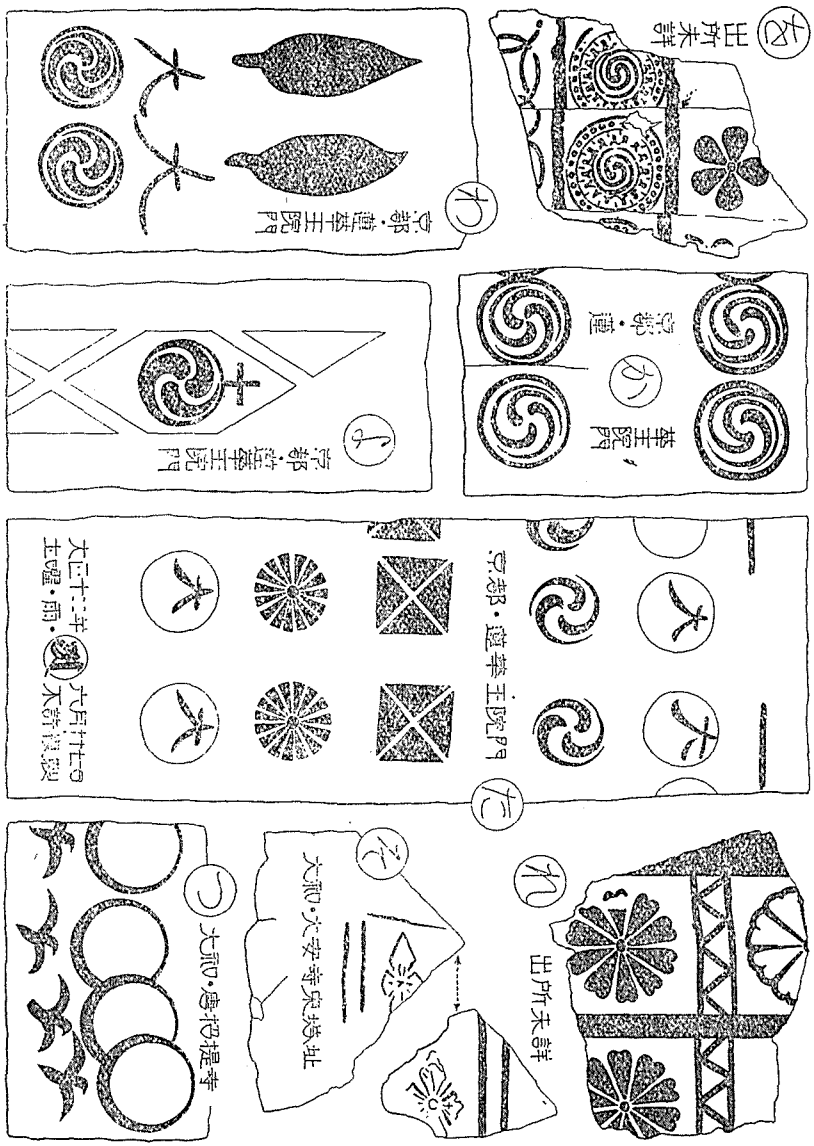
第二十九 留 蓋



●此の圖版分は(1)を除いた全部板石は釋末より(10)迄写真から描いたので(1)・(2)大和・吉野郡大定村大空比咩・世尊寺 大正三十二年七月・木曜・雨・(3)大和・吉野郡大定村大空比咩・世尊寺

第五十圖 ● 干支より空所に至る半片文様十二種

築白十二圖 ●鎌倉室町時代干貝文様九種
 ◎文様何れも左明瞭な方の判り易い様子を直上の図で代表して描いたもの



『建築字彙』とめふたかはら』の條に

略シテ「留蓋」トモイフ。隅棟又ハ降棟ノ軒近クニアル特種ノ瓦ニシテ上ニハ動物等ノ飾アリ。

「雨蓋瓦」トモイフ

とあるが、私のきいた人は何れも留蓋といひ、下に瓦といふ字をつけぬ。鳥衾でもほんとうは下に瓦をつけて「鳥衾瓦」と言はねば正しくあるまいのに鳥衾で通つてゐるのだから、これも略式で「留蓋」としておいてよからう。

夫れはそれとして、右の定義では少しし不完全な點もある様である。なせなら此れを棟の上にも用ふる場合があるからである(第七百十)。故に

留蓋とは大棟の曲り角、大棟及降棟の交會點、或は隅に於いて降棟と掛巴と隅巴、又は向拜最外の軒巴と隅巴との交會點等に、雨押の爲めに用ふる特種の瓦をいふ。其上には人物・動物・植物・天然物等の飾あるもの、又全く無飾のものも

あり。

としたらどうであらうか(第百十四圖乃至第百十七圖參照)。留蓋のことを「巴蓋」といふ人もある様であるが、これは言ふ迄もなく「留蓋」の轉訛で、巴蓋といつては意味が判るまい。

留蓋の上につけてある飾りは種類が多いが、試みに記してみると大概次の如きであらう。

人物。人・龜に乘れる人(浦島太郎か)。

動物。靈獸(麟)・獅子・兔・虎・龍。

鳳凰・鳩・鶻・鶴。(時には鴛鴦の模様なこともある)。

龜。

法螺貝。

植物。寶相花・菊・牡丹・桃・蓮葉・葵葉。

天然物。波・水(水が一番上に寶珠がのつてゐるのや菊の花がのつてゐる(即ち菊水)のものもある)。

理想物。寶珠(多く蓮花座にのる)・紋章。

所謂福神(惠比須・大黒・壽老人等)。

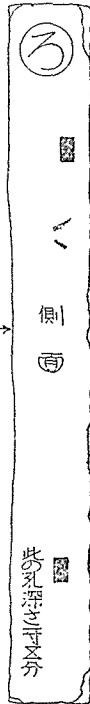
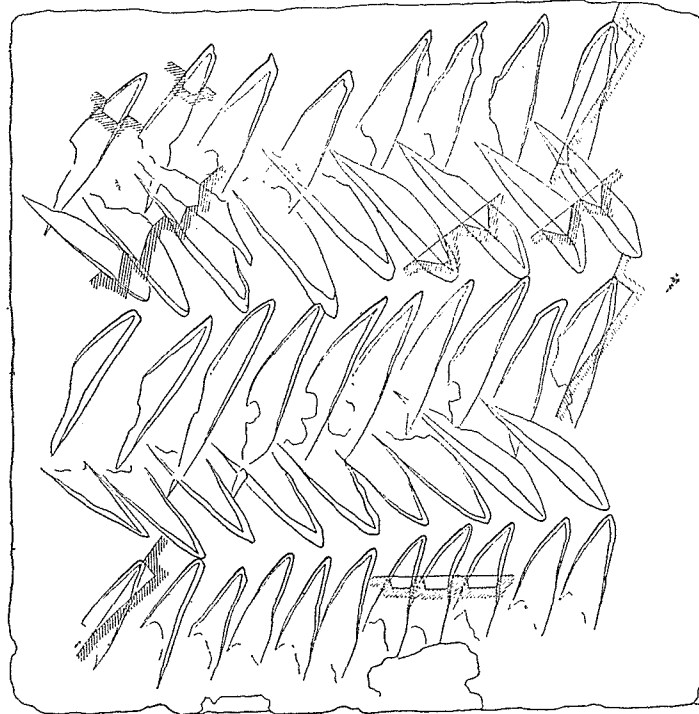
右の内、動物では獅子が最も多く、龜も相當にあ

第百三圖 ●● 矢筈文平凡極印花凡

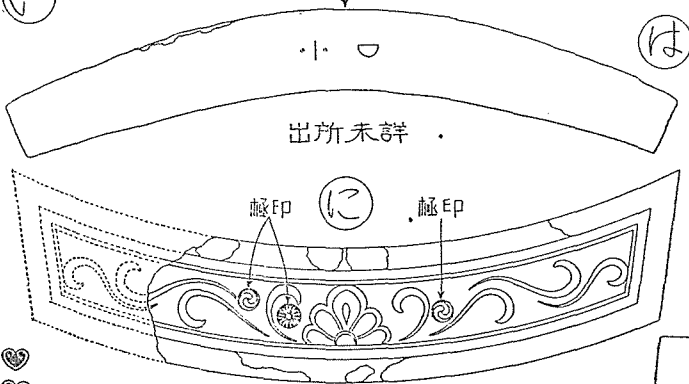
第十一卷

研究の栞

日本古建築研究の栞



い



は

・丑七月十日 雷雨・此の圖をうつる・
 大正十四年 金曜

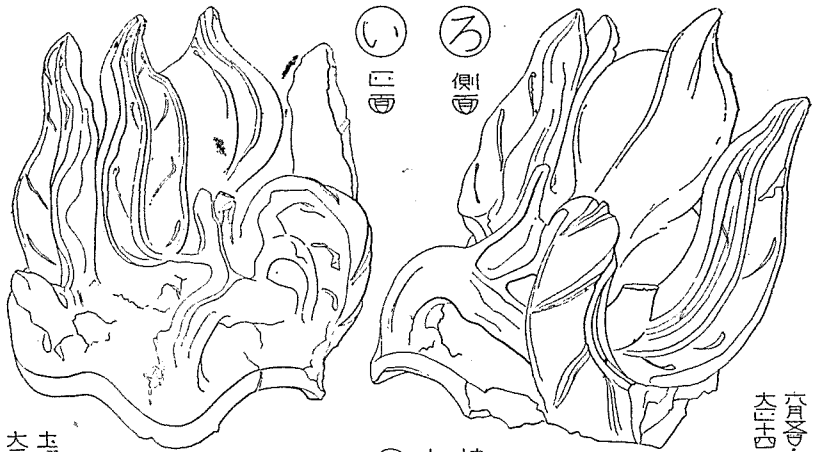
花凡側面 ↓

第三號

一三五 (四七五)

茶良・東大寺東塔址出土

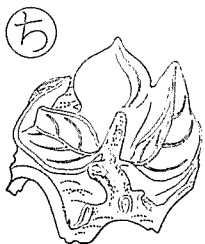
第百十四圖 ● ● 室町江戸時代留蓋五種



六角金糸
大正十四年
複製
入許

土曜坪明於八阪神社写
大正十三年十月貳十文

樽内留蓋貳種
京都市八阪神社
い・ろ・は・に



本能寺庫裏燈燵留蓋



同寺内袖堀留蓋

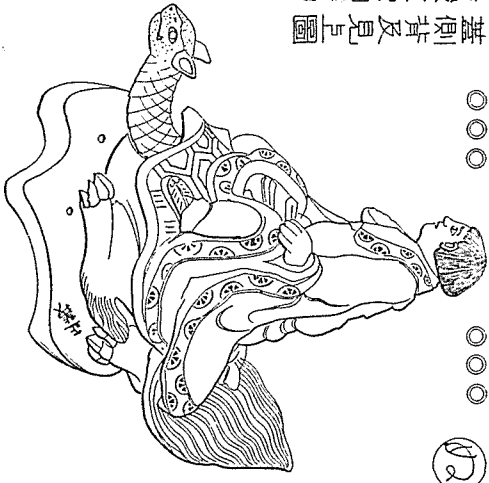


背面及見上圖
眞院門留蓋正
本能寺塔頭燈

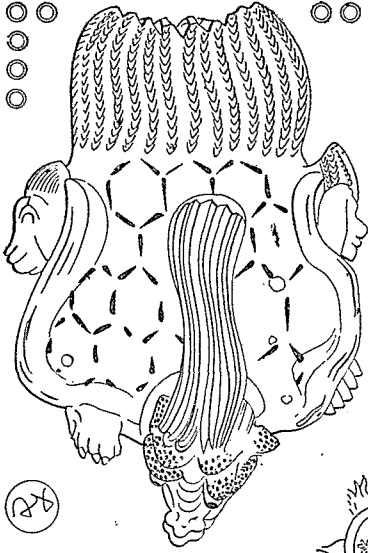
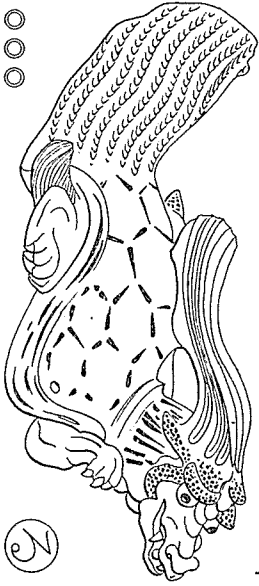
第五十圖・江戸時代の蓋三種・大正四年六月
 日本曜好齋

本能寺庫裏玄關の蓋側面

三月五日留聲
 四種大正三年



蓋側背及見上圖
 寺假本堂西拝堂
 本能



る。植物では牡丹と桃とが一番多い様である。

扱て此等特殊の瓦はいつ頃から初まつたかよく判らぬが、大して古くはない様である。或は古いのかも知れぬが、大概壞れて亡くなつて了つたのであらう、だから遺物からいふと鎌倉と認められるのではないやうである。

いつかも書いたが、繪巻物の繪は割合に注意をして親切に描いてあるから、可なり信用が出来るものであるが、夫れに留蓋をかいたのは見當らない。見當らないのは實際になかつたからと思はれる。先づ今のところ此の種の瓦は

室町時代 位から出來たのではあるまいかと考へてゐる。實例は八坂神社樓門に上つてゐる寶相花と桃とのが當代のものらしい。第百十四圖⑥。

⑦・⑧・⑨に其正側面を描き、尙第百十六圖⑩・⑪に寫眞を掲げておいたから、夫れをみれば判ることと思ふが、桃も今の桃とは全く異り、實も葉も大

分に工合がいゝ。また寶相花は六瓣より成り、花は勿論葉も決して牡丹の種類とは思へぬ。寶相花は古しからあつたので、裝飾畫に現はれてゐる此の植物の形の變化を考へてみると、室町時代には丁度この位になつてよからうと思はれる。此の寶相花は後に自然不知不識の間に牡丹に變つて了つたらしく思はれるが、或はさうではなくて、寶相花は寶相花で室町時代で終りを告げ、其後改めて牡丹が用ひられたので、趣味の變遷のため前者は淘汰され、後者が此れに代つたのかも知れぬが、似たところがあるから初めの様に考へられぬこともあるまい。或は私が寶相花といつたのは、事實さうではなくて初めから牡丹であつたかも知れぬさうなら問題はないが、牡丹としても今のとは全く異なるので、時代の判定は間違つてゐぬつもりである。

留蓋とは關係がないが、鏡の裏についてゐる模

第百十六圖

京都市八阪神社博門留蓋写真 其壹



第百十六圖 同 其貳



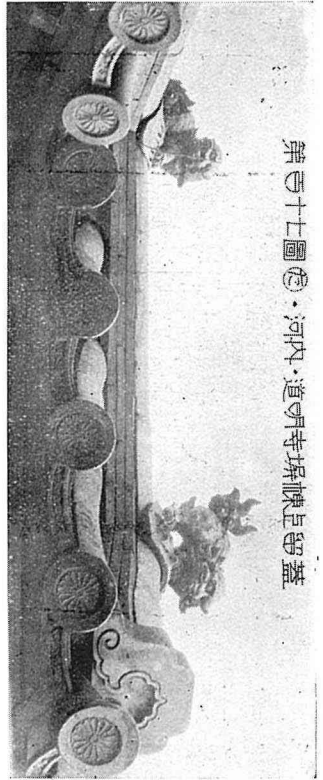
様の中の鳥——水鳥・雀・鶴——や、磬についてゐる孔雀・鳳凰、又は建築裝飾として長押・樞・棚等に用ひられてゐる金具の文様等の變遷を考へてみると、時代によりていろ／＼變つてゆくところがよく判つて面白いものである。

桃山時代、のは探したらあらうが、今生憎手元にない。昨年近江の膳所町あたりのある神社の門の屋根でみた様な氣がするが、確かな記憶がないし、改めて見に行くひまもないから他日に譲り、直に次の

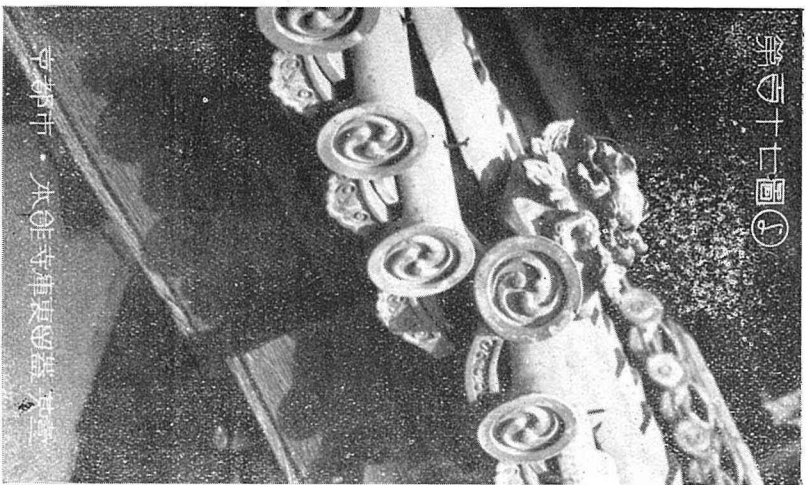
江戸時代、に入ると實例は澤山にある。實は江戸も現代も大して變りがないから兩方一所に引くるめてかいておく。

獅子は盛に用ひられたが、前代墓股内の彫刻に流行したところを見ると、大凡桃山位から始まつたとしてもよからう。獅子は満足に四足で立ち、又は座つてゐるのはめつたになく、大概是逆立をしてゐる。屋根の角での鯺立ちは危さうで苦しさうで、見たところ愉快

築四十七圖 ⑤・河内・道明寺埴輪土留蓋

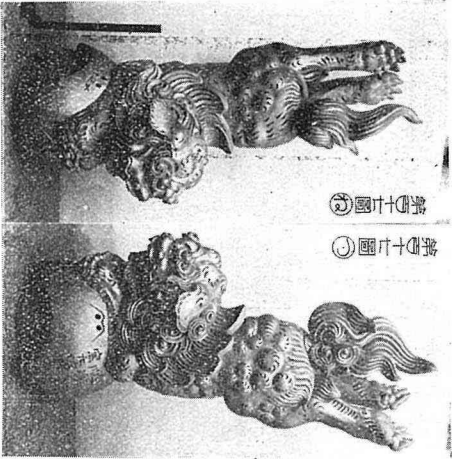


築四十七圖 ⑥

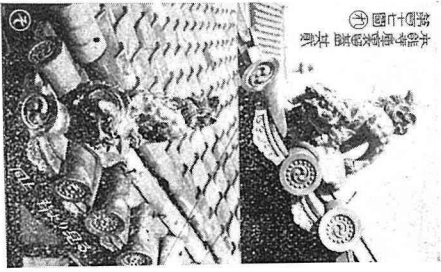


宇治市・本願寺埴輪土留蓋

築四十七圖 ⑦
築四十七圖 ⑧



築四十七圖 ⑨
京都府京都市東山区・東山



第一百十八圖 ①

第十一卷

研究の葉

日本古建築研究の葉



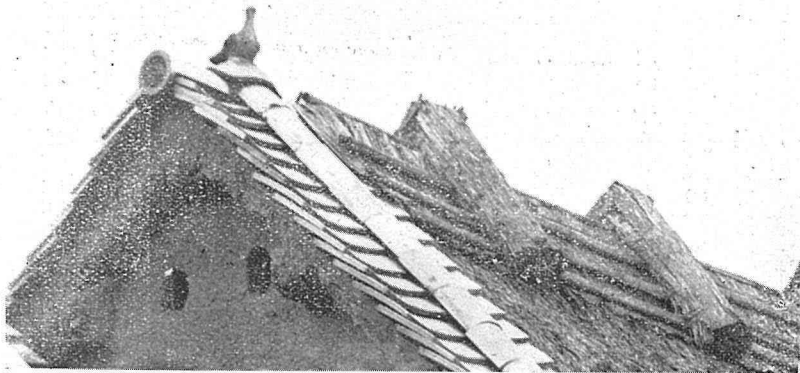
奈良市沓蓮町之農家

第一百十八圖 ③

奈良市沓蓮町之農家大棟上留蓋

第三號

一四一（四八一）



ではない。また時としては牡丹に唐獅子を配したのがあるが、牡丹のつけ所がないので、隣りの行の何もいらぬ所へ特に飾りに牡丹丈けをつけてあるが、かう形式に流れては全く始末に悪い。まだ探したらこんなのは他にもあらう。

第百十七圖⑤・⑥は一昨年の秋瓦職人が全力を盡して造つたものである、これは目下新築中の本能寺本堂へ用ふる瓦を自分の家から納入する目的で、多くの瓦製造業者が競争の體であるが、たゞでは効力が薄いから銘々が見本をもつて來て自家廣告をやる。此れも其一つで、高さ約三尺の美事な逆立ち獅子の留蓋である。曩に記した牡丹に唐獅子のも、今問題にしてゐるのも、其他多くの場合には鯨立してゐる獅子は重心が外に出てゐる、もつと反らなくては、あのまゝの位置に後半身を保つておく事は不可能である。瓦でつくりつけたからいゝ様なものゝ、どうも氣になつていけない。

いくら唐獅子がうまく出來てゐても私には感心が出来ない。此れ等に比べると、同圖⑤・⑥・⑦の如きは何れも四足で立つてゐる丈けに、重心も喰み出してゐないし、苦しさうでもないから餘程よろしいのである。

花園妙心寺庫裏煙拔きの留蓋は浪に兎で、拙いものだが珍らしいと思ふ。江戸時代末期の腕前は大概この位のものであらう。他の獅子の夫れと共に何れも文化五年の銘があるから確かである。浪の中へ兎が飛び込んでゐる形は餘り面白くない、夫れよりか兎らしく苜蓿の葉でも食べてゐるところにした方がよかつたらう、併し重心のそれぬ逆立よりはよろしい。

龍や虎や鳳凰は澤山ないやうである。私の知つてゐる唯一の例は、奈良市三條通の東側に淨教寺といふ寺の正門たる四脚門に乗つてゐるものである。此の門の夫れは四神に象つたやうで、表通り

に面した方即ち正面には、右(東)に龍左(西)に虎を置いてあるが、これは青龍白虎らしい。後側には兩方(東北及西北隅)共に鳳凰をのせてある、即ち朱雀——いふ迄もなく朱雀も鳳凰も同じと見てよろしい、薬師寺金堂本尊臺正面についてある朱雀は鳳凰と何等の變りがないのでも判らう——らしい。此の朱雀は南側へもつて行き度かつたらうが、既に龍と虎とで占領せられてゐて場所がない、そこで仕方なしに北側へもつて來たのであらう。夫れもいゝが何故玄武をやめたか。こゝ迄やつたのなら、蛇は巻きつけないでもいゝが、耳の生へた首の長い蓑龜でも西北隅へ置けば四神完備し、寺は益々繁榮したらうに惜しいとをして丁つたものだ。

鳳凰か鴛鴦かよく判らぬが、ごつちかといふと鳳凰らしいのは、法隆寺塔頭善住院——本誌第十卷第二號第七七頁下段終りに迄くかいた明治の蓮花紋の中に「法皇教會」とかいた瓦の上つてゐる寺

——の門の屋根の四隅にある。果して鳳凰なら淨教寺とこゝとにある事になるし、若し鴛鴦ならまた一新例が出来たといへる。聞くところによると、此の寺の住職は手細工が中々上手で、この寺の屋根にのつてゐる福神のついてゐるの等はみな自分で造つたのださうだから、或はこれも坊さんのいたづらかも知れない。

龜はよくあるが、勿論寫生的のものは一つもなく、何れも理想化した目出度い形をさせてある、即ち蓑龜である。東大寺大佛殿の中門・東西樂門・歩廊の留蓋は全部龜である。また浦島太郎の様な人物がのつたの中にはある(第百十圖)。人物が瑞龜に乗り浪を分けて行くところは、桃山時代(慶長十三年)の代表的建築たる仙臺市の大崎八幡神社拜殿の臺股内の彫刻にあるから、こんな種類の留蓋は前代位から出來たのかも知れぬ。

靈獸は麒麟らしい。一例は大阪市東區本町の本

願寺別院の塀にのつてゐる。目出度いものといふところであつたのだらう。

人物はいけない。いつか檜玉にあげた京都岡崎公園の武徳殿には人形がのつてゐる。夏はあつさうだし冬は頭から雪が積つて寒さうでいけない。

水鳥は珍らしからう。奈良の東大寺關伽井屋のが夫れである。十年許り前迄は菊の花と葉のがつてゐたが(第五十八圖⑧、これは古しの實測圖だ、其後寺から、其時の留蓋の菊が描いてある)、其後寺で修理をしたとき今にかへたのである。此れは

水鳥だからといつて所謂ハンサ(Hansa = The swan of eternity)ではなく鶺鴒である。『東大寺要録』の二月堂記事中

……而遠敷明神恒熹獵漁精進是希臨行法之末晚以參會聞其行法隨喜感慶堂邊可奉獻關伽水之由所告示也時有黑白二鶺鴒忽穿磐石從地中出飛居傍樹從其二迹甘泉涌出香水充滿則疊作爲關伽井……とあるによつたのであらう。鶺鴒が飛び出したあ

とから甘い泉が流れ出したから其處を關伽井とし、其關伽井の上に造つた屋形の屋根に鶺鴒をのせたところは、東大寺の坊さん達は餘程考へたのだらうが、其考へはよかつたけれども瓦職人の腕前が不足であつた爲め、出來は餘り上等ではない。夫れにしてもこれだけの繪ときをしなければ、變な鳥が屋根に乗つてゐるのを見ただけでは分げが判らぬのは少し困る。こんな謎の様なものでなしに無飾のものにした方がよささうである。

奈良市及び其附近の農家の屋根には特色のあるのが多い。曩に鳥衾のところで記した奈良市油坂町の防火壁附の家も其一であるが、大棟の兩端に鳩をつけた留蓋のあるのは、今記憶してゐるのは奈良市内では北市町に二軒と、同じく法蓮町、つい近頃は添上郡佐保村大字法蓮の民家の屋根に可なりある。人若し奈良の女高師の横から佐保川に架せる石橋を渡りて此の町に入るならば、新し

い硝子戸入の建物もなくもないが、今ならまだ大部分は主屋の屋根は防火壁附の藁葺で、炊事場の夫れは煙拔きの腰屋根のついた瓦葺の特色ある農家を左右に多く見出すであらう。そして其所謂防火壁の大棟には第百十八圖⑥・⑦に於いて見るが如く、兩流れの雁振(瓦圖)と拜みの掛巴との交叉點即ち大棟の上に鳩附の留蓋がのつてゐるのである。こんなに澤山もろつてゐるのは一寸他にはあるまい。

此れ等のうち第百十八圖⑥は第百〇九圖④と殆んど同じだが、所謂防火壁より藁葺の棟の方が高い。第百十八圖⑥は大棟のところは同じであるが向て右手の方に往來に便所が突き出してゐる、これが此の邊の農家の造り方の一特徴で、勿論體裁もよくなし、あついで時分に町を歩くと芳香馥郁？たるものがあるが、町の一端へ立つて他端を眺めると、殆んど門並此の式だから洵に堂々たるもの

である。法蓮の民家の大棟の末端に乗せてある鳥つきの瓦は何れも一個づつであるから、第百〇九圖に比べると幾分淋しい感がする。けれども特色があつて頗る工合がいゝ、今は少ないが元は屹度門並かうであつたのかも知れぬ。私は殆ど五年間此の町の一隅に住んでゐたから、毎日往復に棟の瓦で出來た鳥をみて歩いたのであつた。

法螺貝は澤山あるかどうか知らぬが、一例は法隆寺西院經藏の屋根に乗せてある。我國では昔から修驗道の人達が法螺貝を吹くと定つたものであるが、裝飾としては餘り用ひられなかつたらしい。今のところ心當りは高野山奥の院道にある上杉家廟の正面臺股内の彫刻(法螺貝・榮螺・赤貝・石決明・他、に魚四尾と蝸壺と藻と浪と。)、近江竹生島鎮座の都久夫須麻神社の日暮御殿内部の蒔繪、京都伏見の稻荷神社神輿の一の勾欄飾金具にある厚肉の貝類裝飾(出後)及び鏡の裏の模様の中にある位であるが、元來海中に棲息する腹足類の

代表者を屋根の上へのせて、年百年中天日に曝しておくのは、からの具にあらざる限り、大なる矛盾である。水に縁ごころか、水がなくては生きて居られぬ位密接な関係のあるものを建築物の一部に用ひたのは、農家の妻の畑出の孔の代りに「水」字をきりぬいたり、鬼板に「水」字を出したりしたのと同じく、火災豫防の一助としたのだと解釋するよりは、八吉祥の一又は千手觀音持物の一としての螺と考へた方がいゝのかも知れぬが、何れにしても見たところ決して快感は起らぬものである。

植物性のもものでは桃・菊・牡丹等何れも新しくなる程拙くなる、第百十四圖⑬・⑭・⑮の牡丹は新しいが中々よろしい、此れ等は⑬・⑭・⑮から轉訛したと考へるのが穩當であらう。同じ牡丹でも第百十七圖⑯のは餘り下につき過ぎてゐるから、牡丹といふよりは寧ろ甘藍の様に見える。⑯・⑰等の桃

は⑱・⑲に比べると大分の差がある。一は首が短か過ぎ一は細過ぎて折れさうである。

寺の屋根に用ひて一番いゝのは蓮葉であらう。これは蓮の葉を下を向けて瓦の交叉點へ被せたので、即ち留蓋の下の實際役に立つ覆瓦其物を蓮葉にしたのである。元來蓮葉はいふ迄もなく略圓形で縁は波形に曲つてゐる。其性質を巧みに利用したのであつて、實際の蓮葉を下を向けておいて寫生したのと同じである、と同時に左程に目立ちもせず、物が物だから寺に一番似合つてゐると思ふのである。

浪や浪に寶珠は最も新しい様だ、何れも薄つべらでいけない。子供の玩具の鐵葉製の水出しから出てゐる水の如く貧弱極まるもの許りである。

留蓋の種類は未だ他に澤山あらう、氣をつけて調べたら面白いのもあらうが、今はこれ丈けより種がないからこれでやめておくが、いづれ心がけ

ておいていつか増補することにしようと思ふ。

* * * * *

瓦について書かねばならぬことは、上記した他にも相當にあるが、文様がないから一般には餘り興味がないのと、専門になり過るとの理由でやめておく。初めはほんの一通り簡單にかくつもりが長くなり、足かけ三年かゝつてしまつた。たゞ瓦の一部分丈の貴重な紙面を澤山に割かれたことを役員諸氏に向て感謝し、今回を以て愈々瓦をやめ、次回は軸部へ下つてきて「板扉」に就いてかくことにする。(大正十五年二月二十五日稿了)。

第百十一圖に「平安より室町に至る平瓦文様十一種」としたのはうつかりして「奈良より……」とかくべきのを誤つたのである。五月の中頃に気がついたが、既に製版が出来てしまつたので、やり直すことも出来ず、仕方なしに其まゝにしておいた。

此の圖中①・②等は平安時代でないことはたしかである。將來ある時機にこの文字を訂正して更に製版しかへるが、今は遺憾ながら間に合はぬ。(大正十五年五月二十五日追記)

前號 正誤

第八〇頁下段第十三行より第十四行にかけて、瓦の銘文には脱字があるので意味が全く判らなくなつて了つてゐた。即ち次の様になるべきである。

西京 此瓦つくり

は「人」かも知れぬが
(大概は「であらう」)